

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2026年 9月号 Vol. 18 No. 1

Fringilla montifringilla
Photo by Toshifumi Miki

結果速報

モニタリングサイト1000 2025年度越冬期 一般サイト結果速報 奴賀俊光・森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみに実施）を行っています。2025年度の越冬期は、調査を63サイト（森林48サイト、草原15サイト）にお願いしました。そのうち、調査を実施できなかったサイト等を除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林40サイト、草原14サイトの計54サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

越冬期に記録された鳥類（2025年度）

2025年度越冬期調査では、合計116種（森林82種、草原88種）の鳥類が確認されました。これは、昨年度（2024年度）の120種より4種少ない種数でしたが、2020年から2025年までの最近6年間（過去5年+今年）の記録種数（103種～130種）、実施サイト数（54～66サイト）と比べると、今年度の結果は過年度までの範囲の中にあり、年変動の範囲内と考えられます。また、2024年越冬期に続き、森林よりも草原の方が確認種数が多くなりました。これは、草原サイトでは湖沼に隣接したサイトがあり、ガン類やカモ類などの水鳥の種が多く確認されたためと考えられます。

今回も、調査サイト数が多く単年度での比較が可能な森林サイトについて、比較してみます。2025年度（40サイト、82種）は2024年度（49サイト、87種）より9サイト少なく、5種

表1. 2025年度越冬期の森林サイト(n = 40)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ハシボソガラス	92.5	1	ヒヨドリ	11.56
	ヒヨドリ	92.5	2	エナガ	9.83
3	エナガ	90.0	3	シジュウカラ	7.04
	シジュウカラ	90.0	4	アトリ	5.38
5	ヤマガラ	85.0	5	ヤマガラ	4.74
6	コゲラ	82.5	6	メジロ	4.68
7	カケス	62.5	7	ヒガラ	4.59
	ヒガラ	62.5	8	コゲラ	4.22
9	メジロ	60.0	9	ハシボソガラス	3.52
10	カワラヒワ	52.5	10	マヒワ	3.09
	シロハラ	52.5			

表2. 2025年度越冬期の草原サイト(n = 14)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ハシボソガラス	92.9	1	ムクドリ	10.82
2	カワラヒワ	85.7	2	カワラヒワ	10.34
	ツグミ	85.7	3	ハシボソガラス	5.98
	トビ	85.7	4	ヒヨドリ	5.82
	ヒヨドリ	85.7	5	ツグミ	4.68
6	ハシボソガラス	78.6	6	ハシボソガラス	4.32
7	キジバト	71.4	7	スズメ	4.24
	シジュウカラ	71.4	8	ホオジロ	3.92
	ノスリ	71.4	9	シジュウカラ	3.44
	ハクセキレイ	71.4	10	カルガモ	2.59
	ホオジロ	71.4			

少ないという結果でした。過去2020年から2024年までの森林サイトでのサイト数、記録種数は47～53サイト、87～113種でしたので、2025年度は、最近6年間の中ではサイト数、記録種数とも最も少ない年となりました。特に、2025年度はサイト数が40サイトと特に少なく、そのため、確認種数も少なくなったと考えられます。草原サイトでは、今年度は88種（14サイト）で、2020年から2024年までの記録種数は、63～95種（9～14サイト）でした。最近6年間の変動の範囲内であり、大きな変化はないと考えます。

出現率と優占度

次に、森林サイト、草原サイトにおける出現率、優占度の上位種を表1、2に示し（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの）、森林サイトにおける過去6年間の上位種の出現率の変化を図1に示しました。

一般サイトは5年かけて約420サイトを調査します。調査サイトが概ね同じである5年前の2020年の結果（表3）と今

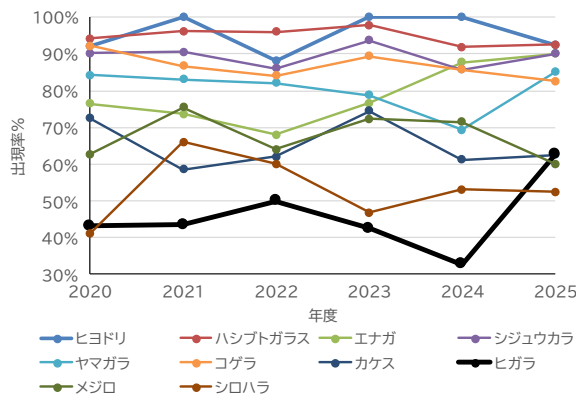


図1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

年度の結果を比べてみます。現時点で集計可能な今年度のデータで、森林サイトの出現率で7位タイのヒガラと、10位のカワラヒワ、シロハラ以外の8種が過年度も10位以内に入っています。順位は多少異なりますが5年前と種構成がほぼ同じということと、これら上位種の大半の出現率の経年変化も安定していることから、森林環境に大きな変化は無いことがわかります。

表3. 5年前(2020年度)越冬期の出現率の上位10種

a) 森林(n = 51)			b) 草原(n = 13)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ハシブトガラス	94.1	1	ツグミ	100.0
2	コゲラ	92.2	2	ハシブトガラス	92.3
	ヒヨドリ	92.2		ハシボソガラス	92.3
4	シジュウカラ	90.2		ヒヨドリ	92.3
5	ヤマガラ	84.3	5	トビ	84.6
6	エナガ	76.5	6	カワウ	69.2
7	カケス	72.5		カワラヒワ	69.2
8	メジロ	62.7		ホオジロ	69.2
9	ウグイス	45.1		モズ	69.2
	キジバト	45.1	10	アオサギ	61.5
	ミソサザイ	45.1		キジバト	61.5
	ルリビタキ	45.1		スズメ	61.5
				ノスリ	61.5

ただし、これに当てはまらない出現率の大きな変化(増減)として、ヒガラの出現率の上昇(図1、太線)があります。2008年度からのヒガラの出現率の経年変化を見ると(図2)、多少の変動はあるものの、2024年度までは概ね40%前後(33%~52%)で推移していたものが、それまでの最大値52%を10ポイント以上も上回り、2025年度は63%という値になりました。5年前はランク外でしたが今回は7位にランクインです。ヒガラについては前回の繁殖期の速報(2026年2月号)でも取り上げ、増加傾向がみられるという話をしました。繁殖期に出現率が上がった原因としては、全国的に人工林を含む森林の成熟が進んだことで分布を広げている可能性が考えられます(植田・植村 2021)。ヒガラは主に山地の針葉樹林等に留鳥として生息しますが、越冬期はより標高の低い山林に移動するものもいます。ヒガラと同様な森林環境に生息するキバシリも繁殖期、越冬期の森林環境で分布拡大傾向を示していることから(2023年8月号)、森林環境が良くなっている(成熟している)ことを示唆しています。このように、少しずつですが環境とそこに生息する種が変化していく

様子がわかるのも、モニタリングサイト1000の継続調査の成果といえます。今回見られた越冬期のヒガラ出現率の上昇が今後も続くのか、繁殖期ともあわせてみていきたいと思っています。

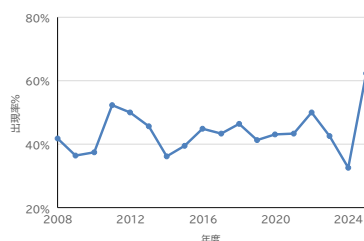


図2. ヒガラの出現率の経年変化

調査サイト数減少の影響？

毎回ある種の増減について述べていますが、今回は趣向を変えて、サイト数について書きます。2025年度の越冬期の調査実施サイト数は、森林40サイト、草原14サイトの計54サイトでした。草原サイトはもともサイト数が少ないので、毎年12~13サイト前後で実施しています。一方、森林サイトについては50サイト前後で実施しており、

過去には60サイト以上を実施した年もありました。今回の森林40サイトは、現在の調査方法に統一された第2期以降では、ここ15年ほどの間で過去最低のサイト数でした(図3)。

越冬期については、年によって積雪の影響で調査ができなくなるため、予定していたサイト数よりも実施サイト数が減ることがよくあります(その場合は次年度に繰り越して実施)。今回は積雪の影響で、調査できなかったサイトがいくつかあり、結果、40サイトしか調査できませんでした。また、現在もですが、今後、モニ1000初期からご協力いただいたベテラン調査員の方の引退や、気候変動による豪雨や台風の勢力増大による土砂崩れ等でサイトにアクセスできなくなることで、近年問題になっているクマ出没の問題、様々な要因で調査実施サイト数が減る可能性が考えられます。過去のニュースレターでも記事にしたように(2018年9月号)、種数の検討には一定数以上のサイト数が必要です。サイト数が少ないと、1サイトあたりの影響力が大きくなり、データが大きくなります。サイト数が多ければ、多少サイト数が変化しても、悪影響を受けなくなります。今回のサイト数ならば、まだ検討可能なサイト数を維持していますが、今後もしサイト数が減る一方になるといつかモニタリング結果にも影響がでてしまいます。モニタリングを継続していくためには、調査員のリクルートや、アクセスできなくなったサイトの廃止や移設・新設、クマ対策(6ページ)など、調査実施できるサイトの確保を続けていかなければなりません。今後も調査員のみなさまには、モニタリングサイト1000の継続のためにご協力をお願いいたします。

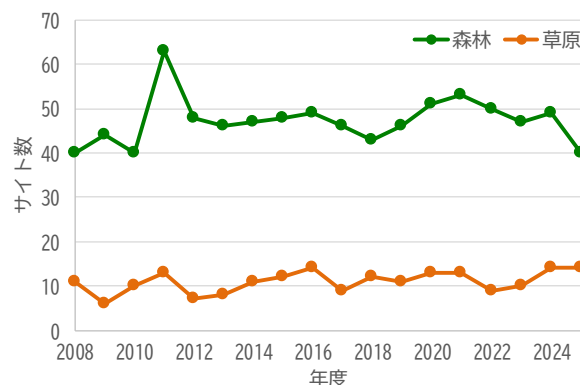


図3. 越冬期の調査実施サイト数の経年変化

調査へのご協力ありがとうございました

2025年度越冬期の一般サイト調査には、69名の皆様のご協力をいただきました。お名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略)。井上珠紀、井野静、瓜生篤、荻原千恵美、加藤正敏、柿本なるみ、関忠邦、関川實、岩切久、菊地弘保、吉沢雅宏、吉邨隆資、及川樹也、近藤朱美、近藤慎一、駒田峰子、櫛田一夫、原口研治、原谷一希、古南幸弘、江口初男、荒明慎久、高田みちよ、今泉順一、佐藤一博、三宅飛鳥、三宅隆、山本実果、似内功孝、室瀬秋宏、篠原盛雄、小室智幸、松原秀幸、杉山時雄、西村四郎、西村祐輝、西脇淳浩、川上由希、川部誠也、前村真珠文、多田英行、大槻佳生、大畑祐二、谷岡仁、谷口秀樹、中崎悦子、中川圭太、中村真理子、塚原和之、田村耕作、渡部通、渡辺政、奴賀俊光、嶋徹、藤原正貴、檜崎隆、梅津節雄、白石知代、飯田直己、飛鳥和弘、武田健、平川由紀子、望月寧那、本井拓弥、茂木瑞稀、有賀正英、林謙治、鈴木正之、齋藤匡浩、高橋和也。

引用文献

植田睦之・植村慎吾. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 府中市.

結果速報

2025年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植村慎吾（バードリサーチ）

バイオマスの値は減少傾向にある

2025年度の越冬期はコア12サイト、準コア4サイトの計16サイトで調査を行いました。

越冬期は年変動が大きく、記録種数、バイオマス（記録鳥類の総体重）共に、年によって多かったり少なかったりすることがあります（表1）。個別のサイトではアトリなどの大きな群れが記録されるかどうかによっても増減が大きく、長期的な変化を見ることが難しいです。ところが、2009年度にモニタリングサイト1000の調査を開始した当初から2025年度まですべての年で調査がされている12サイトの記録を解析したところ、バイオマスは減少傾向にあることがわかりました（図1）。

表 1. 2009-25年度越冬期コア/準コアサイトのバイオマス(kg/10ha)
2017年度の和歌山サイト、2022年度の苫小牧サイトでは1回しか調査を行っておらず、過小評価である

サイト名	越冬期バイオマス(kg/10ha)																																																																															
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25																																																															
雨龍	2.8	6.7	0.6	1.0	5.4	2.4	0.3	1.2	2.5	2.1	0.9	0.2	0.7	1.6	0.1	3.6	1.8																																																															
野幌	21.4					29.5					24.3					16.0					26.4					12.0					11.4					13.0					23.2					51.6																																		
苫小牧	6.0	25.8	22.6	23.0	23.0	27.7	17.4	15.5	29.0	19.4	5.2	5.2	2.0	6.3	3.6	9.9	10.3																																																															
青葉山	79.1					35.5					29.2					19.2					42.4					28.6					23.4					35.3					37.0					28.4					48.2					37.3					43.7																			
小佐渡	12.0	14.1	18.9	10.5	38.1	8.9	23.2	10.9	10.7	11.7	18.5	7.0	14.5	15.0	11.7	21.5	11.6																																																															
那須高原	5.1	2.3	12.7	3.6	4.8	2.6	7.0	3.8	3.9	11.7	20.8	1.8	29.0	1.7	3.7	4.3	4.5																																																															
小川	10.6	22.7	10.8	7.4	24.2	12.5	23.7	16.9	25.7	54.0	16.5	22.2	12.7	21.0	9.4	11.7	16.5																																																															
大山沢	3.8	2.4	4.4	3.2	1.2	2.3	2.0	2.1	3.0	9.1	4.1					1.8					12.1																																																											
秩父	3.5	3.3	10.4	5.8	8.2	18.2	9.2	4.5	10.6	24.5	8.7	5.2	10.5	7.5	10.2	10.6	7.3																																																															
函南	8.4					13.6					14.9					11.5																																																																
愛知赤津	9.0	10.8	12.5	7.2	8.2	9.1	10.4	3.9	9.1	1.8	7.7	7.9	3.6	1.3	4.4	7.1	4.9																																																															
上賀茂	23.8	15.6	33.1	23.4	24.7	30.2	22.8	21.1	18.1	23.1	25.2	19.1	26.8	18.6	20.1	14.7	20.2																																																															
市ノ又	3.2	5.4	4.6	2.7	2.8	8.9	6.3	11.0	7.8	9.0	5.6	15.6	15.9	4.8	19.4	4.8	7.5																																																															
綾	5.0					3.9					4.3					7.0					6.2					7.3					6.4					6.8					13.5					6.5					3.7					5.6					8.8					6.5					7.7					6.1				
田野	12.6	13.6	5.6	9.7	8.4	15.8	8.1	9.4	24.3	16.5	6.7	5.2	5.7	12.8	9.4	8.7	12.6																																																															
奄美	35.2	37.8	14.0	16.6	18.6	26.7	30.0	25.0	30.3	23.8	26.2	24.3	24.4	30.0	38.5	11.1	11.1																																																															
与那	39.0	30.4	23.3	20.0	23.0	22.5	30.3	28.0	27.8	23.6	24.3	20.0	26.2	23.0	15.9	10.9	17.9																																																															
西表	18.1					21.8					6.6					17.1																																																																

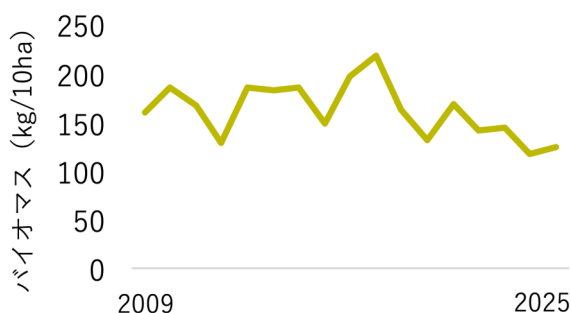


図1. 12サイトで記録された鳥のバイオマスの合計値の経年変化

越冬期調査は、10年以上調査が行われてきた地点が16サイトあります。この16地点を対象とした解析では、越冬期のバイオマスは年平均1.11%減少したと推定されました。しかし、統計的に有意な減少とは認められませんでした。解析対象を、13年以上、15年以上、17年以上調査が継続されてきたサイトに限定してそれぞれ解析をした結果でも、

バイオマスの推定変化率は一貫して減少傾向にあることが示されました。それぞれ、年平均減少率は -1.18%、-1.50%、-1.75% でした。図1で解析に使用した12サイトでは、統計的に有意に減少にあるという結果になりました。これらの結果から、全国的な傾向として越冬期の鳥類のバイオマスの値は減少傾向にあるようだということが明らかになりました。使用する年数によって、有意であったりなかったりと不確実性が残るものの、今後、減少傾向が続くとすると、もう少し調査年数を重ねることで、よりはっきりと示すことができるかもしれません。

大きい群れの記録が少なくなっている？

上で述べたように、個別のサイトでは大きな群れが観察されるかどうかは調査のタイミングによるものも大きく、変動が多くあります。調査のあった全サイトを対象に、総個体数の年変動を種ごとに見てみました（図2）。図示したのは、30羽以上の群れが記録されたことのある種です。

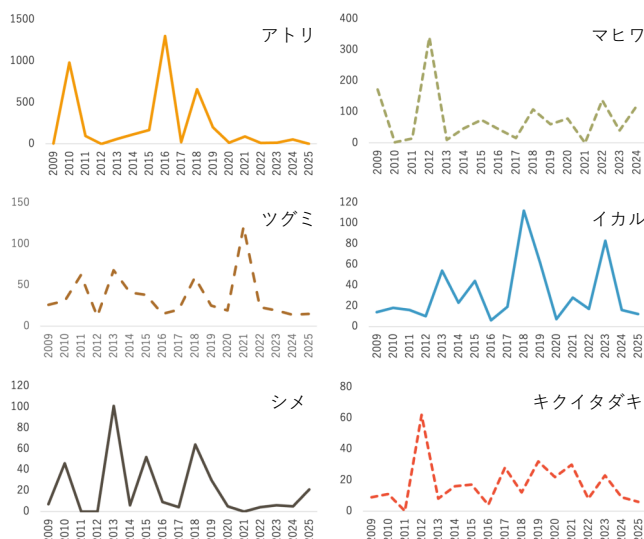


図2. 鳥種ごとの記録個体数の経年変化

増減の幅が大きいです。特に個体数が多いアトリやマヒワでは、近年は大きな群れの記録が少ないようです。シメは、多くの個体が記録された年が多くありますが、2020年以降はありません。一方、ツグミは2021年に多くの個体数が記録された年がありました。個別の鳥の経年変化からはなかなか変化が見えてきづらいような結果でしたが、今後も調査を継続し、冬鳥のバイオマスが全体として増えているのか減っているのかを調べたいと思います。

調査へのご協力ありがとうございました

2025年度越冬期の現地調査では、石田健、井上伸之、岩本富雄、江崎逸郎、川崎慎二、齋藤純子、鈴木由清、田中啓達、中川雄治、中村豊、仁藤悠介、濱田哲暁、宮城国太郎、柳田和美、梁瀬桐子（敬称略）ほか、多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

鳥たちの渡り時期の変化

季節前線ウォッチ11年のデータからみえてきた変化 姜 雅瑠（バードリサーチ）

バードリサーチでは、渡り鳥の初認や初鳴きの記録を集める「季節前線ウォッチ」を運営しています。2015～2025年の11年分のデータを用いて、対象種の初鳴き・初認時期の変化を解析しました。ここでは、秋の季節前線から、特に報告件数の多いモズとツグミについて、最近11年の変化を紹介します。

2015～2025年の初認ピークの年変化

モズとツグミの初認ピークは年によって早かったり遅かったりしていて、各年と変化の傾向は両種で一致していませんでした。

モズは、秋から冬にかけては「高鳴き」と呼ばれる特徴的な縄張り行動を行います。木のてっぺんなど目立つ場所で鳴く姿は、秋の風景として印象に残っている人も多いかもしれません。

今回の解析では、2015～2024年平均と比較して、2025年の高鳴きピークが約11.3日遅くなっていました（図1）。

ツグミは、2025年の秋季ピーク日は2015～2024年平均より約11日早いことが確認されました。年によるモズとツグミの初認ピークの変化方向は一致していないのは、両種に影響する要因が違うからだと考えられます。

モズは気温が高いと遅くなり、 ツグミは気温と無関係

ここまでの解析では、モズとツグミの初鳴き・初認ピーク日の変化が確認されました。その要因を探るため、地域ごとの気温偏差と観察時期との関係について解析しました。

地域別に2025年のピーク日偏差を比較した結果、報告が少ない地域では利用可能な年数が少なく、気温との関係を統計的に評価するには不十分な場合があることが分かりました。特にピーク日は5日単位集計に基づく計算値であるため、十分な報告数や継続年数がない地域では、年ごとの変動の影響を受けやすいと考えられます。

そこで、9～12月の報告数の中央日を指標にした解析を行いました。観察日の中央値（q50）は観察時期分布の中心を示す指標であり、年ごとの記録数の変動や局所的なピークの影響を受けにくいいため、気温との関係を検討する際の補助指標として用いました。

その結果、モズでは関東甲信地方の気温偏差と観察日の中央値との間に有意な正の関係が確認されました（図2）。関東甲信地方の気温が1℃上昇すると、観察日の中央値は約6日遅くなる傾向が見られました。一方、ピーク日についても同様に遅延傾向は見られたものの、統計的に明瞭な関係は確認されませんでした。これは、気温変化が観察の最盛期そのものよりも、観察時期分布全体の前後移動として現れていることを示しています。

モズ（秋冬） 関東甲信：気温偏差と q50

Slope = 6.19 days/°C | p = 0.047 | R² = 0.37

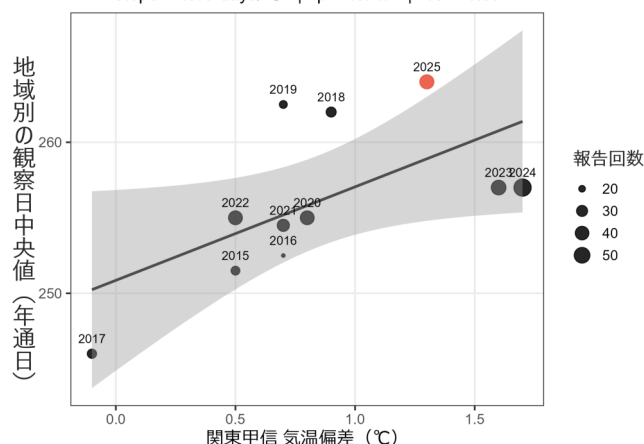


図2. 関東甲信におけるモズ(秋冬)の観察日中央値(q50)と気温偏差の関係

先行研究から、繁殖地に近い場所で越冬する短距離移動性の鳥類ほど、地域の気候変化の影響を受けやすいことが指摘されています（Butler 2003）。今回、関東甲信では気温偏差とモズの出現時期との間に有意な関係がみられ、暖かい年ほど観察時期全体が後方へ移動する傾向が確認されました。これは単年度のピーク変動ではなく、11年間を通しての変化として現れている点で重要であり、関東甲信におけるモズの秋冬期の出現時期が地域の気候条件の影響を受けていることを示しています。一方、近畿では有意な関係は確認されず、同じモズであっても地域によって気温との関係性が異なることが示されました。

鳥たちの季節変化を全国規模でより正確に理解するためには、これまで以上にさまざまな地域から継続的な観察記録を集めることが重要です。「今年は少し遅い気がする」「いつもより早く見た気がする」——そんな日々の小さな気づきをデータに残しておけば、10年後、20年後の大きな変化を読み解く貴重な手がかりになるかもしれません。

引用文献

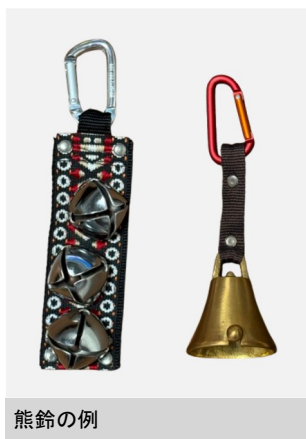
Butler, C. J. (2003). The disproportionate effect of global warming on the arrival dates of short-distance migratory birds in North America. *Ibis*, 145, 484-495.

クマ出没注意！ ～クマ対策について～**奴賀俊光（日本野鳥の会）****・植村慎吾（バードリサーチ）**

近年、各地でクマ（ツキノワグマ、ヒグマ）が人間の生活圏に出没し、人間への被害が増えています。陸生鳥類調査の主な調査地はクマの生息する森林環境が多く、調査中や移動途中でのクマとの遭遇の危険があります。できるだけ安全に調査を行えるように、事務局では、以下のようなクマ対策を実施しています。皆様にも、調査前に自治体等が提供している出没状況等の把握をお願いいたします。

熊鈴などの使用

なにより一番大切なことは、クマにヒトの存在を知らせ、出会わないようにすることです。熊鈴は音が小さいように感じますが、林内では意外とよく聞こえます。熊鈴や笛を携帯するなどして、ばったり遭遇してしまうということがないようにしましょう。



熊鈴の例

車での地点間移動

多くの場合、地点間の移動は徒歩だと思いがちですが、車で移動可能なサイトは、車での地点間移動をお願いしているサイトもあります。事務局までご相談ください。

調査地点の変更

登山道など見通しの悪いサイトではクマの接近に気づくのが遅れるため、見通しの良い車道沿いにサイトを移設したり、移設を検討中のサイトもあります。車道沿いに移設可能なサイトがありましたら、事務局までご相談ください。

2名体制での調査実施の検討

調査を行っていただく方への謝金は、原則1名分を確保していますが、クマが出没する場合は、相談の上2名で調査してもらっている場合もあります。事務局までご相談ください。

危険とを感じる場合は遠慮なく調査辞退の連絡を

調査は安全第一ですので、クマの危険がある、一人では不安、などという場合は遠慮なく事務局までご連絡ください。

熊スプレーの貸し出し

クマに出会ってしまい、向かってきた場合に追い払うためには熊スプレーが有効です。射程は5-10m ですので、クマが至近距離に来て、襲われそうな場合の最終手段として使うものです。

数は限られていますが、貸し出しを行っています。希望される方は事務局までお問い合わせください。

熊スプレーの実射練習

練習用の熊スプレーというものが市販されています。数は限られると思いますが、それを用いて、今後は研修会でも熊スプレーの発射練習を行いたいと考えています。本物の熊スプレーほど高価ではないので、個人的に購入、練習をすることも可能かと思います。



(左)熊スプレーとケース (右)熊スプレーをベルトにつけた様子

担当者紹介

環境省の担当者として澤入が加わりました。



はじめまして。今年度から生物多様性センターで勤務しております澤入健太と申します。3月に大学院を修了し、4月よりモニタリングサイト1000担当として業務に取り組んでおります。大学院では、森林の動物の生態学を扱う研究室に所属し、ライン・スポットセンサス等の鳥類調査によく同行しておりました。私の研究対象はカエルでしたので、鳥類の造詣は深くありませんが、幼い頃から関心は高く、このたび陸生鳥類調査

に関わる機会に恵まれ大変嬉しく思っております。長期にわたり同じサイトで調査を続けるモニタリングサイト1000は、生物多様性を評価するため非常に大きな意義を持っていること、そして、多くの方々のご協力により成り立っていることを日々実感しております。社会人としてまだまだ未熟な私ではございますが、皆様のご意見を伺いながら、よりよい調査が長期にわたり継続できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000陸生鳥類調査 研修・交流会のご案内

現地開催@宮崎大学田野フィールド
2026年10月10, 11日(土,日)
オンライン開催 2026年12月6日(日)

モニタリングサイト1000の長期的な調査を継続するためには、調査員の皆様の継続的なご協力が欠かせません。今年度も新たな調査員の方や現役の調査員の方との交流、調査方法の研修を兼ねた研修・交流会を実施いたします。

昨年から再開した現地での研修・交流会は、今年度も継続します。また、オンライン(オンライン会議システムZoomを使用予定)での開催も継続します。オンラインの方はパソコン等とネット環境があれば全国どこからでも参加することができますので、ぜひご参加ください。事前に「森林・草原調査マニュアル」(https://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/line_census.pdf)をご一読ください。詳細、参加申し込みはHPをご覧ください。また、調査方法について等、事務局に聞きたい事などありましたら、申し込みフォームのコメント欄をお願いします。当日、可能な範囲で回答したいと思います。なお、2020年度の研修会の様子をこちらの動画(<https://www.youtube.com/watch?v=dLVIAjjEm8>)で公開していますので、ぜひご覧ください。



スポットセンサスの
模擬実習の様子(左)と
植生調査の
解説動画(右)

モニタリングサイト1000 調査研修会

【主催】(公財)日本野鳥の会・バードリサーチ

【開催日時および会場】

現地開催

2026年10月10日(土)【座学編】

10月11日(日)【調査体験編】

宮崎大学農学部附属 次世代農学
研究センター 田野フィールド(演習林)
宮崎県宮崎市田野町乙11300

オンライン開催 zoom開催

2026年12月6日(日) 13:00-16:00

【詳細HP】 <https://www.wbsj.org/activity/conservation/research-study/monitoring1000/moni1000-training/>

<https://www.bird-research.jp/1/moni1000/>

【内容】

- ・モニタリングサイト1000事業の概要と成果
- ・モニタリングサイト1000の調査の方法
- ・調査実習(現地開催)、模擬調査実習(オンライン開催)
- ・意見交換

【参加対象】 鳥類調査に興味のある方(経験不問)

【参加費】 無料（現地集合・現地解散）

※参加者のうち希望者は宮崎大学施設への宿泊が可能です。そちらは先着最大26名です。宿泊は男女別になるように調整します。申込の男女比によっては、より少ない人数で締め切る可能性があります。

【お問い合わせ先】

(公財)日本野鳥の会 モニタリングサイト1000担当
〒141-0031 品川区西五反田3-9-23丸和ビル
Tel: 03-5436-2633 (平日10-17時)
Fax: 03-5436-2635 Mail: moni@wbsi.org

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報 Vol.18 No.1

2026年 9月1日発行

発行：環境省 自然環境局 生物多様性センター

編集：公益財団法人 日本野鳥の会

特定非営利活動法人 バードリサーチ

編集責任者：植村慎吾（バードリサーチ）

<https://www.biodic.go.jp/moni1000/>

<https://www.wbsj.org/>

<https://www.bird-research.jp/>

表紙の写真: アトリ(撮影 三木敏史)